

会長 大いに語る

みんなで将来を考えよう

「語る人」 青森行政相談委員協議会会長 関 節雄 氏
「聞く人」 青森行政監視行政相談センター所長 上田 貴 氏



対談風景（五所川原市会議室）

所長 関会長には、「会長 大いに語る」ということで、ご多用のところお出でいただき誠にありがとうございます。今日は、五所川原市のご厚意により市庁舎庁議室をお借りいたしまして、いろいろとお話を伺わせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

会長 よろしく願います。

所長 本州最北の青森も少しずつですが暑くなってきましたね。まず、会長のお住まいのある五所川原市について、ご紹介いただけますでしょうか。

平成の大合併 五所川原

会長 平成17年に旧金木町と旧市浦村との1市1町1村の新設合併の形で新生五所川原市が誕生しました。平成の大合併と称して、全国に合併旋風が渦巻いた社会情勢でした。その時の人口は6万4、

438人との統計数字が出ています。年々人口が減少する中で、合併による様々な弊害が心配されたのですが、少しでも効率的な行政サービスの提供をと考えていた各自治体の長、議会議員の理解の下に、それほどギクシャクすることなく合併が進んだように思っています。

所長 新設合併により誕生した五所川原市ですが、特徴としては、旧市浦村が中泊町を挟んで飛び地になっています。この辺りはどのような経緯を辿ったのでしょうか。

会長 当初から旧五所川原市を中心として、北津軽郡及び西津軽郡を一带とした巨大な合併構想を持っていたようですが、西津軽郡の方では全体合併は時期尚早ということで合併協議会から離脱してしまいました。それから北津軽郡と旧五所川原市の合併の方向で動いたのですが、結果的には郡内の旧中里町と旧小泊

村が合併には加わらず、独自の市町村合併で中泊町となったことから旧市浦村が切り離される形で飛び地となってしまうのです。

所長 そのようにして、新生五所川原市の誕生ということになったわけですが、五所川原市という立佞武多（たちねぶた）がとても有名ですね。その由来についてご紹介いただけますか。

会長 まず、その背景となるものが、五所川原市の中心商店街の活性化です。市の都市計画の中に立佞武多を取り入れてはどうかというのが当時の市長の念願だったようでして、これを市の起爆剤にしようという構想が持ち上がった、立佞武多そのものもさることながら、市を活性化するにはどうしたらよいのかということを経々々考えていたようです。

立佞武多というのは、高さ21m余を誇る巨大ねぶたなのですが、障害となるのが市内に張り巡らされた電線でした。そこで、電柱の地中化ということから始めました。その間に五所川原駅前「立佞武多の館」というものを造り、五所川原市に留まらず東北のイベントの目玉にしようとしたのですが、これが功を奏し、地元出身の吉幾三さんも盛り上げには、是非とも自分も参加したいということで今日に至っているということでありま

す。これが今や東日本大震災をきっかけとした東北六大祭り（絆祭り）にも参加するようになり、大手旅行代理店のパンフレットにも載るほどの成長、にぎわいぶりを見せてきたということです。



五所川原立佞武多祭り

所長 私も何度か立佞武多の館を訪れ、実物を拝見させていただいたことがあるのですが、思った以上に高さがあり、実に壮観なねぶたですね。

また、「五所川原」といいますと、旧金木町出身の太宰治も非常に有名です。

現在、生家が「斜陽館」という名称で観光名所になっていますが、こちらについての会長の想いといいますか、お感じ方をお聞かせいただけますでしょうか。

会長 金木町となれば、当然のように「太宰治」と全国にその名をとどろかせるようになりました。太宰作品の「走れメロス」は、自分が小・中学校の時代から知っている人間の奥深さについて語った物語なのですが、人間の心の葛藤を描いた作品が、初出から80有余年の長きにわたり読み継がれている。日本の文学史上にかつてないほど、深く人間の本質というテーマを掘り下げ、綴ったということで今日まで愛され続けているというふうに認識しています。

また、様々な人間の心の葛藤を描く洞察力の鋭さを垣間見せる作風、その反面、自身は自殺してしまうという内面の弱さ、また、人間「太宰治」なのではないかなと感じているところがあります。

所長 なるほど。そういったところに今も若者の心を惹きつける魅力があるのでしょうか。

それでは、続いて、会長のご経歴についてご紹介いただければと思います。

行政の中へ

会長 私は、昭和42年に地元の実業高校を卒業後、いずれ農業を継ぐことになるだろうと思ってはいましたが、少しでも社会の状況を知りたい、勉強したいということで、念願かなって希望していた海上自衛隊に入隊が決まったのですが、亡き親父からストップがかかってしまいました。

結局、自衛隊への入隊はあきらめ、代わりに市の消防職員採用試験を受験させられまして、五所川原消防署へ入隊ということになりました。そこから役所生活のスタートであります。

消防予備隊から始まり、訓練を積み、実際の火災現場への出動や救急隊員として、当時、導入された救急車への乗務も経験しましたが、6年ほど経過して、市役所支所へ異動となりました。そこからがまさしく行政事務のイロハのイからの出発です。

窓口業務を様々経験しましたが、結婚後は市教育委員会へ異動となりました。教育委員会では、当時、市内の各学校では修理修繕の要望が非常に多く、その対応に奮闘する傍ら、児童・生徒の転入転出や学級編成にも次第に関わるようになりました。6、7年ほどが過ぎまして、

今度は市税務課への異動となり、税務行政に2年携わりましたおかげで課税の仕組みについて理解するようになりました。

その後、また、教育委員会に戻り、学校建築に係る補助事業に携わるとともに、児童生徒の減少に伴う学校統合にも関与し、多忙を極めました。

それから、市人事課に移り、市規則の全面改正に従事し、初任者研修にも2年ほど従事したのですが、三たび教育委員会に異動し、総務課長を拝命することになり、年齢も42歳となりました。

その後、様々な経験を経て、市長秘書室長を拝命しました。当時の市長への随行業務もしばしばで、行政の最高責任者としての市の将来展望や政策の在り方に



関会長

についての考え方に直接触れ、また、訪れた全国各地の行政の姿を間近に見るとともに、日本の行政の中心となる中央省庁を回り、そのかじ取りを肌で感じる事ができたのはそういう機会からです。また当時、五所川原市長は東北市長会の代表を務めておりましたので、そちらの随行業務を通じて貴重な経験をさせていただきました。

所長 なかなか得難いご経験ですね。ところで、会長はスポーツの方面にも深く関わっておいでということで、先ほどお話の出た「走れメロス」にちなんだマラソン大会の立ち上げに関してのエピソードなどがありましたらお聞かせいただきたいのですが。

会長 先にお話ししたとおり、五所川原市は太宰治の出身地である金木町と合併したのですが、今は亡き当時の市長が私の狭い執務室にやってきて、「どうか関君、『走れメロス』を立ち上げてくれないか。」と言われました。合併直後ということもあり、市長も各団体から金木町との合併の暁には何か目玉となるイベントを企画しないといけないと言われていたようで、「全国的に名を馳せている太宰治の『走れメロス』にちなんだマラソン大会を立ち上げてはどうか」という声があるから、君、一つ何とか頑張っ

てくれないか。」と私に白羽の矢が立ちました。本来担当すべきであろうスポーツ健康課長を差し置いて私のような者と辞退申し上げたのですが、「いや、君にしかできない。」と大いに持ち上げられて、結局引き受ける羽目になりました。

準備期間にして約1年、開催当日は、ゲストラナーとして青森県板柳町出身で五所川原市にも縁のある福士加代子さん（元オリンピック出場選手）をお迎えして大いににぎわいをみせ、大成功を納めることができました。マラソンイベントの翌年度以降の道筋もつけて、これでやれやれと思った矢先、今度は学校統合の仕事が降ってきました。

当時、全国的に取り沙汰されていた学級数の減少に伴う閉校や学校統合に関して、五所川原市も例外ではなく、少子化による複式学級が進んでおり、その解消策として学校統合が喫緊の課題でありました。いざ仕事に着手し、目指すは3校統合ということで、各PTAや地域住民、学校関係者等に対する説明会を何度も繰り返し返して理解を求め、遠距離通学に伴うスクールバスの運行など細部にわたりきめ細かく煮詰めていき、ようやく翌年には新設統合校の発足にこぎつけました。翌年の3月に60歳定年を迎えましたが、改めて振り返ってみますと、苦労、

苦難の多い役所生活だったと思います。

所長 さて、会長は、市役所を定年退職されてすぐに行政相談委員を拝命されていらつしやるのですが、そもそも行政相談委員をお引き受けになられたのはどのような経緯があったのでしょうか。

定年後の人生

会長 市役所定年後、毎日がサンデーと喜んでおりましたのも束の間、様々な方面から声が掛かりました。一つには地区の方から社会福祉協議会に携わってこないかと声が掛かり、また、家庭裁判所から市役所への調停委員の募集について、推薦の依頼があるので引き受けてくれないかというお話もございまして、特に仕事も持っておりませんでしたので、私でよければと双方とも引き受けたのですが、ちょうどそのタイミングで前任者が退任した行政相談委員にもなってくれないかということで、結局それもお受けしたという形です。お陰でそれまでと一変、あつという間に繁忙な日々にかつてしまいました。

所長 確かに会長はこれら以外にもいろいろな役職をお持ちで、定年退職されてからの方が更に忙しさが増したような感じですね。

会長 定年退職後は、やはりゼロからの出発、学びが非常に多くてなかなか簡単にはいかないのですが、長年お世話になった地域の人々への恩返し、少しでも役に立つことを考えていた矢先でしたので、これもまた大きな転機と申しますか、頑張つてこれた要因の一つかなと思っています。

所長 会長はスキーの腕前も相当だと伺いましたが。

会長 私は、スキーが大好きでして、東北はもとより北海道はほとんどの有名スキー場を滑走し、冬山の新雪に自分だけのシニールを描き、振り返りながら自分の良さを味わって青春を楽しんでいました。驚いたのは、5月連休からオープンする月山スキー場に全国からわざわざ集まってくるスキーヤーの多さです。春スキーの醍醐味を満喫したいスキー馬鹿は、どこにでもいるんだなと感じていました。これらには常に家内も連れて歩きました、若かりし自分たちのよい思い出です。

また、夏山登山も大好きで、富士山はもちろんのこと、尾瀬ヶ原・燧ヶ岳・安達太良山・月山・岩手山、北海道は大雪山・利尻岳・礼文島・斜里岳・羅臼岳と様々な山に登りました。



ふるさとの山 秀峰 岩木山
(写真提供：田舎館村 金枝壽孝委員)

所長 ところで、会長は今年で9期18年目を迎えられるます。委員活動が続けられて、日頃お感じになっっていること、また、心掛けていらっしやるようなことがあればお聞かせください。

会長 まず一つには、相談に来られる人というのはもちろんですけれども、この社会において、各家庭においても、自分でも然り、「悩みの無い人は無い」という言葉が非常に重く私のしかかっている言葉であります。それは、あらゆる行政においてもそうかと思いますが、それが私たちの場合は、相談に来られる一人

ひとりの悩みが少しでも解消されるように、スローガンにも掲げられているとおり、一人ですみず相談をということ、まさしく私はそのとおりだと常日頃考えています。私のような者でもお役に立てるのであればという思いでいるというのが現状であります。

所長 まさに一人ひとりに寄り添った相談対応を信条とされてきたということですが、これまで相談対応をしてこられた中で、記憶に残る相談事案などはありますか。

心に残る相談事案

会長 では、二つご紹介いたします。

相談者の身になってみればじつとしてはいろいろなが、しかし、自分たちの意思を相手方に伝えると失礼に当たってしまうのではないかという歯がゆさも感じる事案です。

相談者は、長年にわたり母親の所有する土地を県の主催する行政イベントの周遊地として無償提供してきたようでしたが、母親も高齢となり、それらの土地を維持管理することが困難となってきたことから県に買い取ってもらいたいという要望でした。

確かに、相談者の言われるとおり、長

年無償で県に使ってきたという経緯はあるが、県側で当該土地を買い取るとなると、予算確保もさることながら、現地の測量に始まり様々な行政決裁を経なくてはならず、そう簡単にいくものではないと承知してはいるものの、相談者の意思を最大限尊重するような形で県の関係部署の方へ相談内容を伝えました。その際、担当者からは、「検討結果については、行政相談委員であるあなたへお伝えすればいいのですか。」と尋ねられましたので、「いいえ、結果の回答までは求めません。行政相談委員の仕事は、あくまで相談内容をお伝えし、検討をお願いするまでです。」とお答えしました。あまり深く追求して、後々問題が生じることはよろしくないと判断した次第です。あくまで、行政相談委員の仕事は相談内容を関係機関へ通知することなのでから。

また、もう一つは民事事案ですが、こどもを持つシングルマザーからの相談として、「交際中のお相手は離婚経験者でこどももいるが、結婚前提に相手との間にこどもを出産するも身内の猛反対に遭い結婚は断念、現在養育費について調停中とのこと、相手の男性からは結婚を前提に車をプレゼントされていた。結婚が破談となったが、この場合、プレゼントされた購入車両の取扱いはどうなるの

か。」というものでした。相談者には養育費の調停の中での解決をできないものか家庭裁判所によく相談してみることが教示して終わりました。その後、どうなったかは報告を受けておりません。過去に調停委員を務めておりましたので、落ち着く先は様々予想されますが、家庭裁判所でのような判断をされるのか。行政相談委員としての矩(のり)をこえずというのが肝心であると考えさせられる相談でした。

所長 そうでしたか。会長は家庭裁判所の調停委員をお務めになられたのは、平成21年から令和3年までの13年間と長いですが、本件事案は調停委員を退任された後に受けられた相談ということになりますか。

会長 そうです。また、家庭裁判所からは、調停委員として務めていた間に知り得た情報や知識をもって、調停的な要素を持つ相談に関わるようなことがあつてはならないと再三言われてきておりましたので、それを肝に銘じて対応したということです。

巷の動きを行政に

所長 会長は、毎年11月3日の文化の日にかかる2日間、五所川原市を担当する

ほかの3人の委員の皆様とともに、五所川原市総合文化祭において、広報活動とともに相談所を開設していらつしやいます。私も昨年参加させていただきましたが、地域住民と触れ合うこうした活動が大変重視されているように感じますが、実際のようにお考えでしょうか。

会長 まず、そこを選んでいく理由ですが、文化祭に訪れる人たちというのは、基本的に芸術や文化に対する意識が高く、各分野で日頃活躍されていたような人たちが集う場所と考えています。また、日頃から社会の様々な動きや行政に対する要望をお持ちなのではないかと思



五所川原市総合文化祭

いますし、そういう意識を持った人たちの声を伺う絶好のチャンスと考えており、また、その人たちを介して相談に訪れてくれることを期待してのことです。

所長 関会長は、令和3年4月に青森行政相談委員協議会会長にご就任されました。昨年1年間ご一緒させていただいて、理事会などでほかの役員の方々の問題意識を吸い上げ、共有しようと努めておられるのが印象的でしたが、青森地相協としての活動の在り方や課題などについて、お考えをお聞かせください。

会長 はい。基本的に地相協の活動というのは範囲が広いのですが、しかし、実際には、年に一度全会員が一堂に会する総会の場において、事務局が作成した事業結果報告、予算・決算の承認に始まり、新年度の事業計画及び予算案などについての承認等お決まりのコースで、特段の異論なく終了、散会となっています。

せっかく県内各地から会場にお越しくださっているのに、行政に対する様々な意見などを述べる機会が少ないというのは少し残念に感じています。

協議会でも皆さんから何かしらの意見やお話を伺いたいと常々述べているとおりです。

所長 青森地相協は、昭和42年4月に発

足し、来年(令和9年4月)で創立60周年を迎えます。今後の青森地相協の活動についての抱負をお聞かせください。

未来を憂いてならない自分

会長 一口に60周年、正直「もうそんなになるのですか。」という思いです。

ふと考えたときに、大げさに思われるかもしれませんが、どんどん人口が減り、世帯数も減るといような中で、「衰退する郷土を救うためにはどうすればいいか」、是非、皆さんの意見を聞きたいのです。これは全国、各都道府県の至るところで思っていることではないかと思っています。私は、郷土そのものが衰退してしまうのではないかという将来を憂う気持ちで一杯なのです。繰り返しになりますが、「郷土を救うにはどうすればいいか」という言葉をスローガンに、60周年ということをはかの委員の皆さんにお伝えして、今後の地相協の在り方を少し考えていただければ有難いと思います。

所長 これまで以上に委員の皆様のご意見をお聞きしたいということですね。

また、会長におかれましては、長年

のご功績が認められ、令和3年11月に総務大臣表彰を受賞されました。行政相談委員になってよかったなと思うことはありますか。

会長 思うことというよりも、私の一言が少しでも、一人でもお役に立てればそれでいいのかなと思っています。そんな大それたことは考えてはいません。そういうことで日々相談活動が続けてきているところです。

所長 さて、いろいろとお話を伺ってきましたが、会長は日々真剣に行政相談活動に向き合われて、いろいろなことをお考えだなということを感じます。本対談の結びとして皆さんにお伝えしたいことがありますらお話しただきたいと思っています。

会長 自分勝手な思いではありませんが、少子高齢化、中心都市の空洞化、超高齢化社会と叫ばれて30年、40年と経過し、様々な言葉が飛び交う中で、このまま、さらに20年後、30年後となりますと、日本社会全体が沈んでしまうのではないかと思います。クマの出没被害もそうですが、様々な事象が取り沙汰されています。

社会の基本は人間であると思います。その人間がいなくなれば、この世は終わりを迎えてしまいます。人間を

増やす大胆な政策を早く打ち出してほしいと思います。

忍び寄る年齢には勝てないが、気持ちだけでも夢と希望を、と思う昨今です。

